

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ジェレヴィーニ・アレッサンドロ・ジョヴァンニ

本論文は、1980年代に日本の文学史の舞台に登場した3人の新人女性作家の作品群を、「身体」という一貫した視点から分析することを通じて、この時代に日本の社会が蒙った大きな変化とその文学的な表現との関連を明らかにすると同時に、作品の中に「書かれた身体」とそれを「書く身体」との関係を踏査することによって、言わば「少女的エクリチュール」とでも呼び得るような、おそらくは世界的にも新しいエクリチュールの可能性とその限界を見極める作業を行ったものである。

対象となった作家は、年齢も生育環境も作家としてのデビュー時期もほぼ似通っている三人の作家、吉本ばなな、松浦理英子、小川洋子である。80年代の日本社会の変容をメルクマールとなるいくつかの事件を取り込みつつ記述した第1章に続く各章では、それぞれの作家の作品において、「身体」という場とその表現をめぐって、人間関係の崩壊とその再生の希望がどのように書き出されているかが、細かなテキスト読解を通して分析されている。すなわち、吉本ばななの『キッチン』においては、「食」という人間の本源的な生命活動から出発して「家族」概念のシミュラクル的再生が賭けられており、また松浦理英子の『ナチュラル・ウーマン』では、「自然の」身体をも「性的なオブジェ」と化す倒錯的な関係を通じて自我の解消が、そして小川洋子の『シュガータイム』では、食欲異常の主人公を通じて、死あるいは聖なるものという「身体の彼方」が夢みられていることが論述されている。すなわち、これら三作家の作品群を貫くのは、「食」、「性」、「死（沈黙）」とそれぞれ問題となる身体の位相は異なっているものの、崩壊した人間関係を、異常や倒錯として現れる「身体」の擬制＝犠牲的な表現を通して再生しようとする「書く身体」の激しい欲望である。しかし、「書かれた身体」と「書く身体」との関係をこのように別括しつつ、論文提出者は、同時に、それが限りなく少女のまままでとどまろうとする一種のナルシシズム的な欲望のループに陥らざるをえないという限界の指摘に到達する。その限りでは、この論文は、対象とした作家に対して、言葉の正当的な意味で「批評」的な作業ともなりえている。

このように、本論文は、時間的な距離が比較的に近い対象を取り扱っており、審査会でもまずその点が問題となった。一方では、他に先駆けて80年代の新しい文学潮流の歴史的な意味を、「身体」という独自のプロブレマティックにおいて統一的な視点から研究したことを高く評価する意見もあり、また他方では、文学史的な評価がまだ確定していない、現在進行形の対象を扱うことへの危惧を表明する意見もあつ

た。しかし審査会全体としては、外国から来た研究者が、同時代の日本の文学を、論文に併せて提出された参考資料（吉本ばなな『白河夜船』、『ハチ公の最後の恋人』、『TSUGUMI』、『Sly』、松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』のイタリア語訳）が示すように、実際に外国語に翻訳しながら研究したことの意義は大きく、博士論文のひとつのありうべき形態として認められると判断がなされた。

また、「身体」をめぐるプロブレマティックを扱う理論的枠組みが、ウンベルト・ガリンベルティやロラン・バルト、また各種精神分析理論など多種にわたっており、そこに方法論的な一貫性が不在であるとの意見も提出された。しかしまた、本論文の重点は理論的な整備であるよりは、翻訳の「現場」から出発して、新しい文学現象を解説することにあり、むしろ巻末の詳細な書誌が示すように、各作品の初出時の書評や、提出者自身によるものも含む、作家のインタビューなどきわめて細かな資料を含んだコーパスを通しての総合的な理解の作業こそが評価されなければならないとする意見も出された。

また、すべての審査委員が、本論文の日本語の柔軟さと滑らかさに讃辞を寄せたことは付け加えておかなければならない。

このようにいくつかの問題を内包する論文ではあるが、審査委員会は、論文提出者に対して、今後、1) これら女性作家の仕事を、世界の文学のなかに位置づける論文、2) また、翻訳を通して現れてくるそれぞれのテキストの言語態についてさらに具体的に掘り下げた小論文、を書くことが望ましいという特別の要望を付加しつつ、総合的に判断して、本論文が日本の現代文学の研究に新しい展望と新しい視点を加えた功績を評価すると結論した。

以上の審査により、本審査委員会は、ジェレヴィーニ・アレッサンドロ・ジョヴァンニ氏が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。